

学位請求論文審査要旨

2012年2月8日

申請者 遠藤 不比人
論文題目 破綻／思弁するモダニズム——死の欲動とイギリス戦間期の文学
（『死の欲動とモダニズム——イギリス戦間期の文学と精神分析』
慶応大学出版会、2012年2月29日刊）

論文審査委員 中山 徹
中井 亜佐子
武藤 浩史

1. 本論文の内容と構成

本論文は、イギリス・モダニズム文学と同時代の精神分析が共有した言語的な身振りとその強度を、「戦間期」という歴史的な視点を導入しながら読解を試みる。その目的の一つは、従来の英米文学研究において暗黙の了解になっていると言ってもよい「文学」と「精神分析」という制度的な区分けを、具体的なテキストの言語に即して攪乱することにある。この制度的な区別は、精神分析を「文学理論」というそれ自体制度化された言説と見なしながら、それを文学言語の解釈のための一種のメタ言語として応用するという態度を通じて実践される。この読解姿勢は、しばしば、文学言語のみならず精神分析の言語的な強度を、英語圏で形骸化し制度化された「文学理論」なる水準に還元、単純化してしまうことになる。本論文は、むしろ、精神分析が理論的な言説として破綻していくプロセスを注視しながら、そのプロセスが同時代の文学言語と濃密に共振する様を精読していくことを目指す。理論的あるいは主題論的な破綻というパフォーマンスにおいて、イギリス・モダニズム文学と同時代の精神分析の「間テキスト性」を読解することに、本論文の主眼がある。さらにそこに歴史的視点を導入しながら、モダニズム文学と精神分析という制度的な分類がまさに破綻するところにあらわになる独特のテキスト性に、「戦間期」という歴史性が刻印されていることを明らかにする。

英文学研究者として精神分析に関する豊かな知見を備える著者が、フロイトの「死の欲動」概念を補助線としたイギリス戦間期文学の新しい読解という一点に洞察を集中させた論考である（A4、本文137頁、註5頁、引用文献7頁）。

本論文は以下の各章から構成されている。

序章：破綻あるいは失敗の美学/倫理——イギリス・モダニズム文学と精神分析

第I部：ヴァージニア・ウルフ

第1章：「欲動」の美学化とその不満——『ダロウェイ夫人』と「快感原則の彼岸」

第2章：ラディカルな「内部」としての「外部」——『灯台へ』とメラニー・クライン

第II部：ブルームズベリー

第3章：「母」を巡るメタ心理学——ブルームズベリー、クライン、モダニズム

第4章：リットン・ストレイチーのクイア的自己成型——『エリザベスとエセックス』

第III部：戦争

第5章：不在の戦争、あるいは享樂の反復——キャサリン・マンスフィールド「至福」

第6章：心を開いた生の傷——メイ・シンクレア『ロマンティック』

第7章：共同体とエロス、あるいは死の欲動の美学化——ウィリアムズ、エムプソン、フロイト

エピローグ：ラディカル・クライン

註

引用文献

2. 本論文の概要

序章では、レオ・ベルサーニのフロイト論（『フロイト的身体』）を援用しながらT・S・エリオットの『ハムレット』論とヴァージニア・ウルフの『灯台へ』が論じられ、本研究の理論的枠組みが提示される。エリオットが「客観的な相関物」の欠如と呼んだハムレットの心的興奮と、『灯台へ』の登場人物ジェイムズがあらわにする父親への過剰な憎悪（「乳幼児の過激な「多形倒錯」の過剰」と筆者が呼ぶもの）とに、「快樂原則」を逸脱した心的刺激としての「死の欲動」が読みとられる。ベルサーニが、欲動に関するフロイトの理論的言説の破綻に注目し、それを欲動の可能なる昇華形態として評価したように、筆者はこれらのテキストの「破綻」を「死の欲動」のテキストのパフォーマンス化として評価する。そしてジャクリーン・ロウズのプロイト論にそってこの「破綻」を「真理」へと突き進む欲望としての戦争」と対置することで、「破綻」というテキスト性に「ラディカルな「反戦論」としてのポテンシャル」を読みとる。

第I部「ヴァージニア・ウルフ」は、イギリス・モダニズム文学において正典と見なされるウルフの二つの主要作品『ダロウェイ夫人』と『灯台へ』を扱う。この二つのテキストにおいて、戦間期の階級闘争が「死の欲動」というフロイト／クラインのメタ心理学によって媒介、表象されていることが明らかにされる。第1章では、ウルフの『ダロウェイ夫人』が同時代の階級闘争をフロイトの「死の欲動」を彷彿とさせるテキスト性において表象していることが論じられる。両者に共通するのは、みずからの主題的、理論的枠組みでは表象できないものを表象しようとする試みの破綻を審美的に解消しようとする「テキスト的保身」とでも呼ぶべき身振りである。その審美的なテキスト的保身を攪乱する過剰な強度にこそ、「死の欲動」の不気味な身体性＝テキスト性を触知すべきであることが主張される。『ダロウェイ夫人』において現れる「テキスト的症候＝破綻」、つまり労働者階級（の身体）を美的／政治的／ブルジョワ的に表象＝代表することのラディカルな不可能性

が丹念に記述される。第2章では、「戦争後の戦争」と称される1920年代の階級闘争に直面したウルフの『灯台へ』とクラインのメタ心理学との間テキスト性が読解される。『灯台へ』が、クラインの超自我の暴力性と自我によるこの暴力の外部的投影という心的機制を、いかに同時代の階級闘争におけるブルジョア的不安の構造として美的に言語化しているかが記述される。

第II部は「ブルームズベリー」と題され、いわゆる「ブルームズベリー・グループ」と称されるこの集団のメンバーにおいて精神分析との間テキスト性が濃厚な、ウルフ作品以外のテキストに着目する。第3章では、メラニー・クラインの翻訳と紹介に尽力したアックス・ストレイチーとジョン・リヴィエールという、従来英文学という脈絡で十分な注意を払われてこなかった女性分析家のテキストが扱われる。両者のクライン擁護論において「母」という形象がもつ「超越論的な」ステータスが強調され、歴史主義的な精神分析批判の限界が指摘される。第4章は、伝記作者として名を知られているもののモダニズム文学の正典とは目されてこなかったリットン・ストレイチーの『エリザベスとエセックス』とフロイトのダ・ヴィンチ伝『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼児期のある思い出』との間テキスト性が帯びる、「戦間期」における政治・思想的な意義を論じる。「良心的兵役拒否者」たるストレイチーのクイアな言語が蔵する精神分析的な反戦論としての可能性が明らかとなる。

第III部は、「戦争」と題され、第一次大戦後の言説空間を「外傷的」なものとして見做しながら、一種の「戦争文学」としてのモダニズム文学という視点を導入する。「ブルームズベリー」以外のモダニズム的な言語が、フロイトの言う「反復強迫」をテキスト・レヴェルで体現し、主題的な破綻を通じて「死の欲動」をパフォーマンス的に反復しながら、特異な「戦争文学」と化すことが論じられる。キャサリン・マンズフィールドの短編小説「至福」を読解する第5章では、登場人物の身体を貫く過剰な「至福」の反復が戦争神経症患者における外傷の反復を想起させるものとして読まれ、「死の欲動」にみずからの主題論的統一性を壊乱されるテキストのありようが記述される。第6章では、同時代のウルフとマンズフィールドからフロイトの精神分析からの悪影響を指弾されたメイ・シンクレアの『ロマンティック』が扱われる。作者の意図というレヴェルではフロイトのエディプス理論の悪影響が顕著であるシンクレアの言語が、にもかかわらず同時にその次元に還元できないテキスト性を帯びていること、そしてそれがウルフ＝マンズフィールドに匹敵する細部をテキスト内部に生産していることが説得力をもって記述される。第7章は、戦間期のイングランド表象のパストラル的修辞学に潜在する暴力性を考察する。ウィリアム・エムソンが『牧歌の諸変奏』の草稿版テキスト「死とその欲望」においてフロイト特有の「矛盾」を賞揚していることに注目し、そのテキストが、本論文のフロイト読解と多くのものを共有することを指摘する。「死の欲動」のテキストのパフォーマンスとしての矛盾、破綻はラディカルな反戦論としての可能性を蔵しているという視点からエムソンのフロイト読解に注目し、死の欲動の美学化の不可能性、その破綻に見るべき政治的、思想的な可能性を洞察したエムソンを評価する。

エピローグは、これまで読解されてきたイギリスあるいはヨーロッパの戦間期が生産した独特のメタ心理学的思弁が、現代日本において帯びるアクチュアリティを考察する。筆者は、フロイト的メランコリーとの差異性においてクラインのメランコリーを再評価す

るジュディス・バトラーの議論を参照しつつ、クラインのなかに、「靖国」的なメランコリア／マゾヒズムの閉域から逸脱する可能性を秘めた「サディズムの倫理」とでも呼ぶべきメタ心理学的思弁を読み取る。これをふまえて現代日本のある種の言説空間を「戦間期」的なものとして認識するとき、ヨーロッパの戦間期が生産したフロイトとクラインの「死の欲動」を巡る思弁のアクチュアリティが浮かび上がることになる。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下のとおりである。

本論文は、レオ・ベルサーニが『フロイト的身体』において確立した美学 - 倫理批評を、これまで制度的に「モダニズム」と区分されてきた文学作品に対して実践し、それによっていわゆる「モダニズム文学」を「戦間期」文学として読むという視座を提示、構築する。本論文はこの野心的かつ画期的な試みにみごとに成功し、「一定の」という形容をはるかに超えた成果をもたらしている。その徹底的なテキスト分析を通して、言語内で論理的＝理性的なものが破綻する根源的な場が精査され、素朴な歴史主義や文学理論主義を超えた文学と歴史の関係、文学と精神分析の間テキスト性が明らかになった。これは文学研究制度そのものに対する本格的な批判にもなっている。「文学」というカテゴリー自体を批判的に見直し、「理論」と「作品」とともに「テキスト」として読解する筆者の方法論が、今回の論文によって体系的に示されたことによって、今後の日本の英文学研究のあり方に絶大なインパクトを与えることだろう。

本論文のもつ作品論としての意義も大きい。先行研究の問題点と死角を十分に意識した上でなされるヴァージニア・ウルフの代表作『ダロウェイ夫人』、『灯台へ』に対する鋭利な読解は、ゆるぎない説得力とオリジナリティを備えたものであり、今後、この二作品はもとより他のウルフ作品の批評・研究に対しても影響を与えていくだろう。また、これまでマイナーな位置に置かれた作家や分析家（アリックス・ストレイチー、ジョン・リヴィエール、リットン・ストレイチー、メイ・シンクレアなど）の作品が、ウルフやクラインとならぶ本格的な批評の対象として扱われたことの意義は大きい。本論文がそれらの作品をめぐる今後の研究を牽引し、新たな批評言語の生産の契機となることは確実である。

本論文のもつ、クライン論としての学術的貢献も見逃すことはできない。筆者は、クライン理論を的確に理解したうえでそれを文学批評へと接続するだけでなく、クラインを「戦間期」の言説として読解することによってそこに胚胎された政治性を照らし出した。ロンドンの「ウェルカム・ライブラリー」が所蔵する「メラニー・クライン・アーカイヴ」にまで目を配らせながら紡ぎだされるクラインのテキストに関する緻密な読みは、今後すすむべき、可能性豊かなクライン解釈の道筋の一つを確実に開いている。

しかしながら、本論文に問題点がないわけではない。

方法論的問題。「エピローグ」では「フロイト的なメランコリー構造」が、それまでの章で筆者が依拠してきた概念、ベルサーニのいう「根源的なマゾヒズム」としてとらえ直され、「クライン的なメランコリー構造」に対置される。そして後者のほうが高く評価される。そうであるなら、これは必然的にベルサーニに対する評価の見直しと、本論文の枠組み自体からのある種の「転回」を示唆するものであるが、筆者はその点を明確にしていない。『フ

ロイト的身体』以後のベルサーニの仕事への参照をもふくめ、みずからの方法論にかかわるこの問題について、なんらかの言及や記述があるべきであった。

作品論上の問題。筆者はマンスフィールドとシンクレアを「ほぼ同一の水準で」読んでいるが、「戦争」はそれ自体として表象されるのではなく「育児室の戦争」あるいは「享楽」として反復するという本論文の核となるテーゼをふまえたとき、戦争を直接描かないマンスフィールドと直接描いてしまったシンクレアとの差異およびその評価・解釈が問題になるはずである。その点は明確に処理されるべきであった。

その他の問題。独特の意味を込めて使われる「歴史」や「間テクスト性」という概念、および新歴史主義において用いられるそれらの概念との差異について、もう少し丁寧な説明を付け加えるべきであったように思われる。

しかし、以上の問題点は、本論文の方法論的、作品論的意義にとって致命的なものではなく、その視座の独創性と議論の説得力を損なうものではない。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えます。

最終試験結果の要旨

平成 24 年 2 月 1 日

論文審査担当者

中山 徹

中井 亜佐子

武藤 浩史

平成 24 年 1 月 31 日、学位請求論文提出者、遠藤不比人氏に対し、まず論文『破綻／思弁するモダニズム——死の欲動とイギリス戦間期の文学』の趣旨の説明を求め、次いで審査員より指摘された疑問点への解答を求めた。遠藤氏はこれらの要求に十分かつ適切に応じた。またあわせて課した外国語（英語）試験においても問題なく解答をなした。

よって遠藤不比人氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格と判定した。